

私の小さな伝記

キウメーションバヤルキンバヤル

中学校の時、私は二人には真面目な生徒ではなかつた。他の人より早く小学校に入、

から同級生より若かつたし、背が低くてとちもちびたつた。この時、友達が一人もいなか

たし、中学校に入ってから授業が大人げん難しくなつたし、面白くはなかつた。それは、あ

まり勉強が得意ではなかつた。先生達も私のことが好きじゃなかつた。私は毎日悲し

なつたと言つた。と聞いて思つた。ある日、彼と出会つた。私のクラスに入

つた新しい生徒だつた。背が私と同じくらいで、いつもの人より元気が与え、とてもやさ

しくて温かい心を持つていた。感じがした。しかし、他の人と話をするのは私にとつて

とても恥ずかしいことだったので、二日彼は私のそばの席に腰がけていたが、何も話さな

かつた。ある金曜日の授業の後、彼は私のことこゝろへ来て「じゃ、一緒にいって行つてもい

いびきか。」と言った。「何? 何?」と私は言  
った。「水泳で遊ぶじよし?」とさっさっ一  
ルで君を見つけた。と彼が返事をした。彼が見た  
のは、私が水泳の部活に初めて入った時でし  
た。じやねと言ったのは彼は私に初めて来た。  
プールへ行くと道の中で私達は色々なことを  
話した。彼と一緒に泳いだ時、どうしてかあか  
らたが、ねが、何が何でも話したいと思っ  
たから、他のだれにもそれまで言わなかったと、感  
じていたことを全部言った。ねぶんその時、  
将来彼が私の親友になるはずだと思った。彼  
の名前はボルフと聞いた。彼と会った時から、  
私の気持ちはまるで春に花が咲いた感じだ。  
初めは、彼の笑顔が嫌いだ。それはい  
ったと私に「君にはいい、ばいちゃん又があるの  
に君はぜんぜん気がいいじゃない?」と  
「どうして勉強せずに音楽を聞いているのか。  
」と「自分の家族に感謝しろ。」だと言った。  
だが私は無視していった。半年後、他の人から  
彼の生活のことを聞いた。彼の家族はそんな

に大きき問題があるとは知らなかつたが、それから  
もびつくりした。彼のお父さんはじつもお  
酒を飲んで彼と彼のお母さんに暴力を振るこ  
お母さんのちがはずかな月給をお酒に使うのちと  
聞いた。その話を聞いたころちへ帰って、ひと  
晩中泣いた。翌朝から私はいい人間にたつたら  
と思つた。出来るがぎり、彼を助けてあげな  
ければ私は本当の男ではないと思つて助けて  
あげようとして自分に約束した。  
まず、母に「ボロツさんの両親と話して、  
彼の生活を变えよあげて」とたのみました。  
それから、ボロツさんに会いに彼の家へ行  
た。私は彼を抱きしめて「知らなかつた。ど  
うして、言ひなかつたの。知らなかつた本当に  
ごめんなさい。」と言つた。しかし、彼は相変  
ちらす笑つて「いいえ、もうたしさん助けて  
くれなよ。君がなげれば私はもうあまらぬこ  
じなかもしれないな。」と言つた。母はボロ  
ツさんのお母さんのたぬに新しい仕事を見  
つけてあげ、お父さんをお酒をやめる治療のど

きる施設に入れた。とても長い治療の後ホロ  
クさんのお父さんはお酒をやめることができ  
仕事をし始めた。彼のお母さんもいい会社で  
仕事を始めたので彼らの生活はだんだんよ  
くなってきた。  
私もどんなにいい生活をしたいのかが分  
が、たがら、勉強も水泳の部活も頑張った。  
ホロクの表情も明るくなった。その時から私  
達は兄弟みだしな友情で結ばれている。